

〈座談会〉

北海道の冬とスポーツ・体育

内藤 晋 (1951年世界選手権スピード・スケート500m優勝。元、北海道新聞社運動部長)

久保田 敏夫 (元、体操競技オリンピック候補選手、国体選手、本学経営学部教授)

進藤 賢一 (1961～65年、スピード・スケート国体選手、1996年ワールドロペットマスター、本学経済学部教授)

司 会

森 杲 (本学経営学部教授)

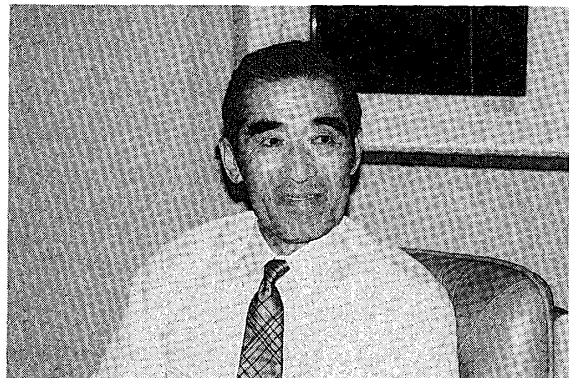
近況から

司会：北海道での生活をいろんな切口から少し突っ込んで考えたい、そのひとつとして今日はスポーツ、とくに冬のスポーツを、テーマに取りあげました。

お集まりいただいた三人の方とも、全国あるいは世界レベルの競技会で活躍した体験をお持ちですが、それはかなり昔のことなので…(笑)、最近はどうなスポーツをしておられるのか、そんなあたりから伺いましょうか。

内藤：それをいわれると弱いんです。本当に恥ずかしくて。何もやってないんですよ。ダボスから帰って、胸を悪くして、それからはおっかなくてね。「絶対、無理したら駄目だぞ」といわれましてね。だから真剣になってできないんです。年をとったら歩くのが一番といわれて、歩くことを心掛けてはいるんですが、それも長い距離じゃない。

道新(北海道新聞社)を退職して16年になりますが、道新時代は東7丁目の自宅から大通り西3丁目の道新まで1キロちょっと、風の日でも吹雪の日でも徒歩で通勤して、エレベーターを使わないで6階の編集局まで階段を上がったんです。まあ、それが毎日の最低限の運動になっていたんですが、定年になっ



てからパタッと歩かなくなって。それで膝を悪くして、いっそう歩かなくなっちゃった。

恥ずかしいから人にいわないことにしているんだけど、最近「何か買い物ないか」って、それを口実にして、市内の交通機関が老人パスで無料になりましたからね、大谷地から地下鉄で大通りまで出て、地上を歩く。デパートに入って階段を上がるんですよ。それを週2回ほどやっている。そしてお茶飲んだりして帰ってくるんです。家にゴロゴロしているのにくらべて、やっぱり外の空気を吸うと、眠るのにも少しは良いしね。歩いてみると歩き加減で体調がわかるんですよ。そんなことしかやっていない。

久保田：私は大学の教員として体育を担当してますから、授業の関係でいろんな種目を自分でも体験しながらやっています。本当の

専門の体操競技のほうは、平成元年の「はまなす国体」を最後にして若い人に指導をゆずって、今は生涯スポーツを手がけています。生涯スポーツでは、今日もやってきたんですがパークゴルフ、それにグランドゴルフとかインディアカとか、ソフトバレー、ミニバレー、ミニテニス。札大にもありますがユニカール。これは皆さん知らないでしょうね。カーリングに似ているんですがスウェーデンでできた種目なんです。カーペット敷いて、その上でストーンを滑らせる。ストーンにスプレーを吹き付けると非常によく滑るんです。札大の養護コースの体の弱い子はあまり激しい運動ができないので、こういう種目をやらせようと思って取り寄せました。駆け引きはむずかしいが、投げるのは簡単なんですよ。

レクリエーション・スポーツは300から400も種類があるといわれていますが、その中で私がやっているのは10か20くらいかな。北海道体育協会の仕事の中でそういうのを私が担当しておりましてね。生涯スポーツだと、させるばかりでなく自分もできますから、一緒に楽しくやりながら普及につとめているというわけです。

進藤：僕は体を動かすのが根っから好きで、とにかくいろんな動かし方をしています。夏はだいたい走るのが中心で、今朝も10キロくらい走りましたが、週3、4回、真冬を除く9カ月で1500キロくらい走るのを目安にしています。走らない日は、近くの公園で家族と早朝テニス。それに不定期ですが山に登るのが年間十数回かな。あとは平岸のプールで泳いだり、体育館でバスケットボール遊びをするんです。

冬は、雪が少ない網走、釧路の教師時代はスケートだったわけですが、いまは二種類のスキー、アルペンとクロス・カンントリーをしています。クロス・カンントリーでは目下、「ワールド・ロペット」という13カ国の長距離コースを走破してロペット・マスターになる、

それに挑戦して8カ国まできているんで、あと5カ国を今シーズンに全部やっちゃおうかと思案しているところです。

久保田：長距離コースというのは、どのくらいなんですか。

進藤：いちばん長いのがスウェーデンの「パーサロペット」で90キロ、いちばん短いのがスイスとオーストラリアの42キロです。90キロとなると、朝、暗いうちにスタートして、夜の帳が降りてからのゴールです。それでも私より年配の参加者もいますよ。クロカンのこつは、持久力だけでなくペース配分なんです。長丁場ですから、途中の食事や水の補給なんかに注意します。もちろん食べ過ぎ、飲み過ぎが一番いけません。

皆さんがいやがる坂を上がるなんていうのも、トレーニング次第でけっこうなスピードでらくに上がれて、それが楽しくなるものなんです。それと、もうひとつはワックス。

久保田：ワックスも自分の技術のうちになるわけですね。

進藤：ええ。大会前日に次の日の温度を予測して、ワックスを選んでアイロンで焼き込むんです。これをいい加減にやったら駄目です。ワックス次第で滑走が非常に楽になったり渋くなったりします。

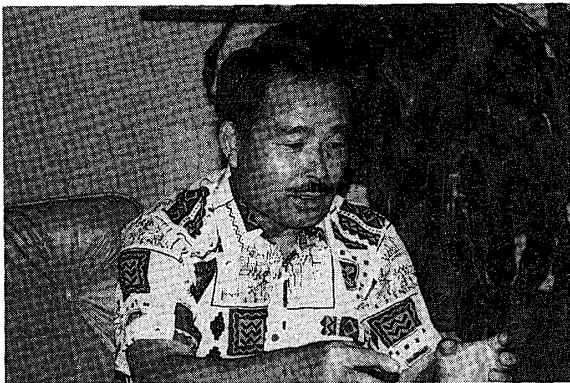
司会：進藤さんはクロス・カンントリーの練習も大会出場も、よく奥さんやお子さんと一緒ですが、だけど運動選手ってどうですか。自分だけやって奥さんや子供がうちで留守番というのが多いように見えるんだけど。

進藤：僕も昔からそうだったわけじゃないんです。札大のスキー同好会にそんな雰囲気があって、そこに参加しているうちに、そんなふうになった。

今年の大会はすべて家族と一緒にした。「大滝国際マラソン」と「札幌国際50キロ」は女房と子供、アメリカの「バーキー52キロ」と「カナダのガティノー50キロ」は大学院生の息子、スイスの「エンガデン42キロ」とノル

ウェーの「ビルクバイネルレネット」は女房と…。

久保田：私は家内が体育の教員ですからね。それぞれ自分でやってるって感じですが、やっぱり昔は子供の運動なんかにかかる時間は少なかったですね。体操競技の指導やっていた時代でも、息子が中学校のころ体操やってましたけれど、私は自分の子を放っておいて他の子供たちばかり夢中で教えてましたから。



一家団欒でスポーツなんていうのは非常に少なかったですよ。子供からすれば「おれの面倒はなにも見ないでよその子供や学生ばかり見て」という悪い親だったんじゃないかな。今、息子も大きくなりましたから、帰省してきたときなんか、お酒飲みながら、そんな話するんですよ。

司会：内藤さんのお子さんは、どなたかスケートをなさいましたか。

内藤：いちばん下の息子がやって、私もちょっと教えたいけれど、ものにならなかったですね。始めたのが遅かったし。小さいころから走るのと野球が好きで、いつもリレーの選手だったし、中学生までは野球やバレー、冬はスキーをやってたんですよ。高校生になってからスケートを始めたけれど、やっぱりものにならないで終わっちゃったですね。今は何もやってないですよ。

スポーツ嫌いになる？運動選手

司会：大学の運動選手が卒業すると、企業に選手としてスカウトされた者以外、スポー

ツをピタッと止めてしまのが、非常に多いように思うんです。忙しくて時間がないというようなことと別に、今まで全精力をつぎ込んだのを、遊び半分にできないという気持ちなのか…。すごい運動をやってきて、ある時からピタッと止めたときの精神状態は、どんなものなんですかね。不愉快にならないものですか、体を動かさないと。

内藤：僕が止めたのは、できなくなったからね。

久保田：怪我や病気で止めるのと、選手生活にきりをつけて止めるのとでは、全然違うと思いますよ。もうこれで十分だというくらいやって止めたときには、少なくとも一定期間、満足が伴っているから。

進藤：僕はスピード・スケート、国体に教員の部で出たのが23歳から27歳までです。28、29歳と北海道の国体監督を2年やったから、通算7年。その後もスケート続けたいと思ったこともあるけれど、技術的に伸びない。やっぱり記録が伸びないと面白くないんですね。ところがアルペン・スキーを始めると、これは出発点がまるっきり低いから確実に伸びる。伸びると面白いんですよ。そういうところがあるんじゃないですか。

内藤：スピード・スケートというのは、とくにきついからね。僕もよく、いま滑ってますかと聞かれるけど、全然滑ってないですよ。あんなきつい姿勢で滑れないです。無理してやっても400メートルのリンクを一、二周したら目はくらくら、膝はがくがくしちゃって。あんな不自然な姿勢ないですからね。

進藤：スケートはトレーニングをコンスタントにしてないとたないし、自分の体力が落ちれば確実にスピードが落ちるからね。

内藤：いま考えると、スピード・スケートなんかやって失敗したなと…（笑）適当にいろんなスポーツをやってたほうが長く楽しめたかなと、本当に思いますよ。

久保田：極めるようなことをやると、ほか

のスポーツもわかるという面があると思うんですけどね。

司会：進藤さんの話にあった、例えば20代で記録的に頂点を極めてそれからずっと落ちていくということになると、やっぱりやっていても面白くないですか。

内藤：若い人と競えばそうだけど、いま国体の年齢別で、あれはあれでけっこう何歳以上の部の記録をめざして夢中でやっている人を見ますよ。自分の体力が落ちたぶんを、どういうふうにかバーするかとか、自分の技術を人に伝えるとか、そういった新しい課題を次々持てればいいんでしょうけど。

久保田：まあ、中途半端にやるのには、なかなかはじめないかもしれませんね。

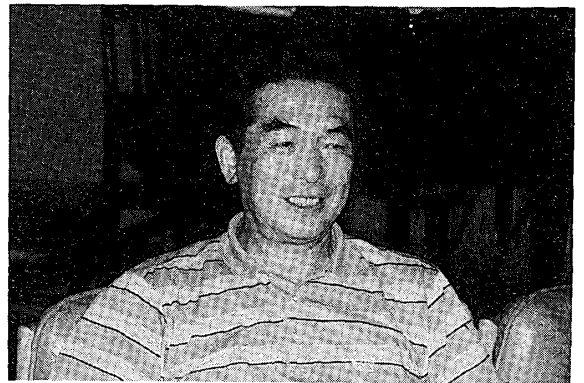
司会：運動選手の平均寿命が一般の人より短いというデータが、ときどき出されますよね。あんまり信頼性が高いデータともいえないけれど、もしそうだとすれば、体をハードに使いすぎてストレスを強めることと、突然止めてしまうので生体のリズムが狂うことがあるような気がするんだけど…。

久保田：私は第一線選手がやってるような競技スポーツは、健康に良くないと思いますよ。とことん体をいじめますから。限界を越えたトレーニングをやりますから、あとで必ず後遺症が何らかのかたちで出る。健康というのは、やっぱり適度の運動でないと。

内藤：競技生活の中でやるハードなトレーニングが本当に体に良くないかどうか、むずかしいところですね。自分の調子と体の限界を知ったうえで、徐々に鍛えていけば悪くないとも思うんです。いまのスポーツ少年団なんかは、ひとつの種目に集中してやらせますけど、小さいうちにひとつに決めてそればかりやらせるというのは、健康上もあまり良くないんじゃないかな。むしろいろんなスポーツをやらせるシステムにしておいて、体がだんだんできてきてから自分に適合したスポーツをやれば…。スポーツ選手のハードな練

習も、そういう前提や条件ができていない場合に、健康にマイナスになる面ができるように思うんです。

進藤：僕は中学生のころ運動クラブに入っていたわけじゃないんだけど、要するに選手が足りないから、ハンドボール大会に出てくれとか、バスケットボール大会、野球大会、サッカー大会と、毎年回ってくるわけですよ。



スケートは冬の遊びとしてやってただけです。高校に行ったら、諏訪湖で競艇もやらされた。僕の高校は変わっていて、野球部は金もかかるし一般の生徒ができないからというので、部をつぶしたんです。野球部をつぶしてでも一般の生徒のスポーツに力を入れようという方針だったので、いろんなことをやりました。そのかわりたいてい強くならなかった。でもそれは長い目でみると良いんですね。

もうひとつは、自覚的にやるというか、やらされるんじゃないでね。嫌になったら止められるし誰にも拘束されない、そういう環境から出発した。それが自分のその後のスポーツとのかかわりに非常に良かったんじゃないかと思っています。スポーツ選手が競技生活を終えたとたんにスポーツをやらなくなるとか、寿命が一般の人より短いとかいわれるのは、身体的な要因ばかりでなく、そんな環境要因があるんじゃないのかな。

競技スポーツへのきっかけ

司会：進藤さんのスケート競技への出場は、まったくの大学卒業後…。

進藤：そうです。僕はすごくラッキーでね。大学を卒業して網走の第一中学に赴任したとき、網走向陽高が全国優勝したんです。鈴木正樹君たちがいた。網走湖の全日本選手権で総合1位、3位をとった江刺忠、登の兄弟も網走にいました。彼らと一緒に滑っているうちに、「先生、けっこうやりますね。国体にてたら？」なんて、おだてられてね。翌年、国体にて、それからスケートにはまっていったんです。網走のスケートが下火になったころ、僕は釧路星園高校に移った。そしたら今度は釧路一高が全国優勝です。釧路全体の雰囲気盛り上がってきて、僕も一生懸命、星園高校の生徒を鍛えたり、選手をスカウトして指導方法を模索しながら一緒に滑りました。全国水準の選手を育てているうちに、自分の記録もその水準になっていったという、そんな具合だったんです。

司会：内藤さんは最初にスケート靴をはいたのはいつころですか。

内藤：小学校に入る前の年かな。こんな小さな靴でしたよ。

久保田：昔はスケートやろうと思ったら、町の中、どこでもやれたんじゃないですか。

内藤：リンクがなくても雪の上でね。雪スケートというのがあったでしょ。ゴム長に皮のベルトで固定したのを履いて、馬櫓のうしろにつかまって滑ったりね。怒られながらやったですよ。

私の親父は自分の兄が大学1年で死んでしまったこともあって、とにかく体が丈夫でなきゃ駄目だといわれて育って、それを子供の教育にも引き継いだんですね。だから僕は勉強しろなんて言われたことがないかわり、毎年、夏休み中、海浜学校なんかにやらされました。冬は冬で中島公園に通いづめで、あそこの池、全面滑れましたから鬼ごっこやったりして、スケートというより縦横に走り回って遊んだんです。フィギュア・スケートの有坂氏が三、四年上でね。金太郎チームなん

ていうのをつくってアイスホッケーやったり。有坂氏の親父さんがスケート屋だったから、われわれの小さいスケートもつくってくれたんです。足に合わせて。

そのころ昭和11年のガルミッシュ・オリンピックにでるスピードの選手が、前の年、苫小牧で合宿練習していました。その選手7人全員が2月11日、札幌で毎年やってたカーニバルに出るためにきたのね。上下真っ白のユニフォーム着て、模範滑走したんです。写真いまでも持ってますよ。そのとき初めてオリンピック選手というのを見たんです。その選手から、こういうふうに滑れなんて、基礎をちょっと教わった。そしておだてられたりしたもんだから、それからスケートをやろうかなということになって……。

司会：おだてられたということは、やっぱり中島公園で滑っていても他の子供よりずば抜けて早かったわけですか。

内藤：けっこう早かったですね。やっぱりちゃんとしたスケート靴、履いていたし。そして毎日、滑ってるんだから、他人より多く滑ってるだけ、そんなに負けないという気はあったですよ。軍隊に行って死んだですけど、一年上の兄貴がいたんです。その兄貴に勝つようになっちゃった。兄貴もこれはもう駄目だといって、札幌一中に入ってからアイスホッケーを始めて、立教大学のアイスホッケーの選手になりました。そのころ立教には有名な選手が集まって、全盛時代をつくったんです。そんなことで、僕がそのままスピード・スケート、兄貴がアイスホッケーということになった。

司会：その後のご活躍はあとでうかがうとして、久保田さん、久保田さんが体操をやられたきっかけはやっぱり、子供のとき鉄棒とか跳び箱とかに抜群の技量を示して…？

久保田：そうじゃないですね。きっかけは何かと、ほかでも聞かれたことがあって、自分でも考えるんですけど…。憧れでしたね。

先生たちもご存じでしょうが体操のオリンピック選手だった竹本正男。あの人たちが活躍してるころ、実演会で田舎にきたんです。昔は外のグラウンドでオリンピック選手たちが実演してみせたんですよ。それを見て憧れたのがきっかけだと思います。ファンレターを書いたら、写真にサインを入れて送ってくれた。その選手は今、国土館の先生で、僕らといい仲間ですよ。

それで小学校4年のとき、やりたかったんだけど、「4年生は運動部はまだだめ」と。それで珠算部に入ったけど、体操を考えながら珠算やってるから、間違いばかり(笑)。やっと5年になって、無理して入れてもらいました。50人くらい部員がいて、体操の試験があるんです。立って膝に頭をつけるとか、足がどれくらい開くとか。それに受かって、それ以来というわけです。

進藤：最初に出会った先生が良い方だったんですか。

久保田：ええ。あのころは専門家かなと思ってましたけれど、いま考えるとそんなに専門的にやった人じゃないんです。だけど指導は熱心でしたね。それで僕は「体操ばか」になって20年近く選手やって、そして選手止めてから指導のほうでも20年近く。もちろん大学の教員になってから他のいろんな種目をそこそこやりましたが、自分の意識で体操を離れてスポーツ全体を見るようになったのは、かなり最近ですね。

指導者論

司会：20年近く選手というと、大学を出られたあとかなり長く現役で…？

久保田：ええ。だけど僕は選手としては全日本で10位になったのが最高ですからね。オリンピック候補選手として最終予選までいったというだけで、たいしたことなかった。いま考えると、どうしておれはあんなに甘かつ

たんだと思いますね。どうしてもうちちょっとやれなかったのかと。

それで26歳で東京から札幌にきたとき、ほんとうに現役止めて指導するつもりだったんです。自分のやれなかったぶん、鬼になって指導しよう。北海道は寒いから、室内競技は進んでるだろうと思ってきたんです。夏しか知らなかったですから。冬になって鉄棒にパツとつかまったら、冷凍庫に手を入れたときみたいにペタッとくっついちゃって、手が離れない(笑)。

札大は僕がきたとき体育館がなかったんです。体育館のある高校でも、暖房なんてないです。あってもダルマ・ストーブか何か。どうしたら北海道の体操、強くできるかと思って、それで私は胸に「札幌大学」と大きく書いて、全道大会にでましたよ。3、4年は優勝しました。そしたら札幌大学に行きたいという高校生が何人かでてきたんです。それと並行してですが、僕は札幌の中央体育館でスポーツ教室の指導をしてたんですが、そのとき教えて札大に入ってきたのがいま就職課にいる岡地君。彼を中心にして体操部が始まりました。彼はすばらしいキャプテンで、人をまとめるのが抜群だった。卒業後もずっとコーチとしてやってもらいました。僕はそれからほんとうに鬼になってやりました。札大の選手を国際大会で優勝させるところまでいきましたから、もう満足ですよ。

司会：内藤さんは、選手が終わってから指導のほうをなさったんですか。



内藤：長いことはないです。新聞社にいましたから、そう選手と一緒にいられませんが、ある程度休みをもらってね。1960年のアメリカのスコアバレー・オリンピックのときはトレーナーやれといわれて、夏の合宿からちょいちょい、花巻温泉で一緒に走ったり、冬は阿寒で合宿したり、そんなことやりましたけどね。

札幌の29年の世界スピードのときもやったな。しかしそう長い期間はできなかった。

進藤：僕は一度だけ、阿寒湖の北海道優秀選手の強化合宿で、内藤さんが監督、僕がコーチで一緒にさせていただいたんですが、そのときのすごい印象がある。内藤さんの指導は…、細かい技術指導なんかほとんどしないんですね。

内藤：何もしないで、ただ行って雪かきしてただけですよ（笑）。

進藤：じゃなくって、やっぱり指導の哲学があるんだよね。たとえば「監督さんのスケート持ちます」って選手がきても「その必要ない」。夜、「ふとん敷きます」ってくると「ふとんは僕が敷くからいいです」と。そういうことを選手にやらせる必要がないという哲学なんです。練習でも「おまえ、こうしろ、ああしろ」と言わないところに僕は感動した。実際、ほんとに相当長い間、選手を見てないと、その選手を適確に指導できるもんじゃない。いろいろガミガミ言っても、選手はオーバーフローでわからなくなっちゃう。

久保田：甲子園の野球なんか見ても、そういう監督さんが増えてきたですね。以前は監督が百パーセント指示した。練習面ではともかく、試合になるとある程度、選手に自主的にやらせる監督が多くなってきたということを感じましたね、今年見ていて。

内藤：選手はそれぞれ個性と持ち味がありますからね。野茂にしてもイチローにしても、やっぱり自分の持ち味をだしてああいう成績だしたんじゃないでしょうかね。

進藤：僕は中学と高校の教師として生徒のスケートを指導したわけですけど、自分で選手をつぶしたかなというような経験もあります。また他の人を見ていて、ああ、あの人ああいうことを言っていたんじゃ選手はつぶれるなと思ったこともある。余計な指導をしすぎて、ほんとうはもっと伸びるのを止めちゃったんじゃないかということがあります。指導者として、そこが実にむずかしい。

久保田：キャリアということもある。若いうちはどうしても、一生懸命にやるのが、選手にたいしてやりすぎちゃうから。

内藤：スケートの監督でもいますね。実業団の監督なんかで。レースごとに細かくひとつひとつ言うのね。だから選手はどうしていいかわからないというか、緊張しちゃって、こうやったら監督に何といわれるかと、そんなことで頭がいっぱいになって、レースになると日頃の力を発揮できないんです。

久保田：練習のときでも指導者はまず、興味づけができなかったら失格ですね。とくに体操競技は世界で女子なんか13、14歳がトップ・クラスでしょう。だから小学校一年生、あるいはもっと早く幼稚園から、ジュニア・クラブというところでやる。そういう子に厭なことをやらせたら嫌いになるし、けっきょく伸びません。好きになったら、今度はきついことも自分でやるようになるんだから。体操の場合、「基本だから前転やりなさい、後転やりなさい」ってばっかりいう先生がいるんだけど、前転を3回もやったら目が回って気持ちのいい人はいないですよ。僕は「そんな基本は後でいいから、宙返りでもやらせなさい」というんです。いまはトランポリンなんかありますからね。大人が補助についてクルッと回してパッと立たせる。ほかの子ができない宙返りができた、という感激をまず持たせて、それから前転や後転ができなかったら宙返りの失敗のとき怪我をするんだよと教えていく。そういう原則は、もっと上級に進ん

でも同じだと思います。

司会：ちょっと論点が変わるというか戻るというか…。さきほどの内藤監督が自分でスケート持ったりふとん敷いたりという話なんです。私もたまに運動部の大会に付き添っていったりすると、旅館に着けば部員がサツと監督と私のスリッパ揃えたり、座布団さしだしたりするのね。あいさつも、いかなる場合も「ご苦労様です！」って、全部、型にはまっている。それはふつうの社会人が好ましいと感じる礼儀やしつと、けっして同じでない。僕は、いまこれだけ日本国民みんなスポーツ好きになってスポーツをやりたい人が増えてきているのに、体育界というところだけこういう独特の雰囲気を持していることを、ときどき不思議に思うんです。さきほど高校野球の監督も変わってきたという話があったけれど、全体として少しずつ変わってきているのかなあ。

久保田：いや、宿舎に帰ったら同じじゃないですか。宿舎ではやっぱり監督は神様で、一年生あたりがみんなやっているとしますよ。

進藤：そういう点は昔もいまも変わっていないような気がするね。

久保田：ええ。練習面や試合では変わってきていても、体質は変わっていない。それがスポーツ界ですよ。

ただ、こういうことはある。私の選手時代、学生時代によく外国から留学の選手がきました。日本の選手は終わったら掃除をする。体育館のマットを畳んで、モップかけなんかする。ところが外国からの留学生は「なんで選手がやるんだ」と。たしかにアメリカに行ってみると、選手は練習をして、終わったら掃除する人は別にいる。私たちの時代に監督は、「自分たちが使う器具、自分が使う体育館は、心をこめて大事にしくちゃいかん」って教えました。日本古来のスポーツ精神というんでしょうかね。それが残っていくのはいいと思うんですよ。やっぱり「心・技・体」なん

です。

司会：掃除のことはすごくいいし、僕が監督でもそうさせます。これはスポーツにかぎらず、日本では労働の現場でも掃除は掃除係を採用するんじゃなく職場全員で、という気風が強いでしょ。それは日本の職場の強みだといわれている。だけど僕はそれと別に、運動部の監督なんかが礼儀をきびしくしつたり団結心を育てたりしているつもりが、一般社会の人間関係のなかで彼らを生きにくくしている面があるのを感じる。社会にでたとき、それまでに身につけた人格をそのまま素直に発揮できないから、職場に順応しようとする生活がスポーツとすっぱり切れちゃうということもあるんじゃないのかな。

進藤：日本のスポーツ選手は本番に弱いという定評があって、練習のときの記録を本番でだせない。ぎゃくにアメリカやヨーロッパの選手は、大きな大会になればなるほど自己記録を伸ばしていくような雰囲気がありますよね。

アルペン・スキーでいうと、日本のスキー人口はもうどこの国にも負けないくらいで、底辺が広い。ところがオリンピックでも世界選手権でも勝てない。猪谷千春の場合はアメリカに留学して、そこからオリンピックにでたわけでしょう。彼は体も小さいのに、あの時代になぜ彼が勝てて、いまこれだけスキー人口がありながら日本選手が勝てないかと、疑問に思います。やっぱり日本の指導体制の問題だとか、その体制から生まれる選手の精神的な問題、それに経験のなさとか、いろんな問題が輻輳しているんでしょうけど。

指導者の最も大事な任務は、先程、選手の持ち味を引き出すという話があったけど、それはいいかえれば選手が自分の頭で考え自分で力をつけるように手助けしてやることだと思うんです。上意下達の軍隊方式じゃ、そのところが一番弱くなる。田島直人、南部忠平、織田幹雄らは、自らの工夫と努力でオリ

ンピックを制した。そういう選手を育てるのが最高の指導者ということになるんじゃないでしょうかね。

金と施設と層の厚さと

司会：ところで内藤さん、最近、日本のスピード・スケートは世界選手権なんかで成績がすごくいいですね。

内藤：おかげさまで。

司会：これはどういうことですか。

内藤：スケート人口そのものは増えていないんだけど、競技人口は多くなっている。大学卒を受け入れる会社が、本州にけっこうできましたから。北海道はいま新王子製紙くらいしか受け皿がないからあんまりいないんですが、本州には、ちょっとした建設会社が選手を3人も5人もかかえて社長が一生懸命やっているようなところがあります。

そしてハイピングリンクというのがあちこちにできて、シーズンがずっと長くなったですね。私たちのところは12月の末から2月11日の紀元節で終わりだった。それがいま、10月から滑れて3月中旬までやれますから。さらに最近は外国に行って夏でも滑れる。オリンピックをやったカルガリー。あそこは毎年ずっと夏でもやってるんで、強化合宿に行くんです。去年あたり、日本から150人もきたといって驚いてたけど、この間聞いたら今年は200人以上行くて…。日本からだけです。夏、外国で滑ってきて、帰ってちょっと陸トレをやって、そしてシーズンに入るという、随分、昔と違う鍛えかたで…。

司会：うかがうかぎりでは、まさに経済力での勝利ですね。

久保田：施設の充実というか向上というか、これはたしかに大きいですね。宮の森なんか夏にジャンプできるんですから。それがあるから日本のジャンプは強いんですね。

内藤：そうだと思いますよ。サマー・ジャンプがなくて半年やらなかったら…。

司会：ただ、ジャンプの話でいうと、北海道のジャンプ少年団の子供の数はものすごく減ってきているのね。メンバーが確保できなくなっているところがたくさんある。一方、長野に今度、すごい立派なジャンプ台ができた。いままではジャンプの施設そのもので北海道がずば抜けてたから強かったけれど、これから北海道はジャンプ王国なんて言えなくなってくるでしょうね。

久保田：施設があっても飛ぶ子供が減るのはなぜかを、考えなきゃならない。記録ばかり追っているからなのか。飛ぶのは楽しいということの子供に実感させないと…。

進藤：私、去年、フィンランドのラハチに行っただすけれど、そこは2006年のオリンピックをねらっているところなんです。立候補のために競技施設をたくさんつくったんですね。その中心がジャンプ台なんです。50、70、90メートル級とありまして、行ってみたら、とにかく朝から選手でもなんでもない市民が並んで飛んでいるんです。女の子もボンボン飛んでくる。なんでこんな連中があんなジャンプ台を飛べるんだろうと思うような人々がね。

そのそばに博物館みたいな建物があって、そこにはイメージ・トレーニングの場所があるんです。そこに立ってボタンを押すと、自分が本当に舞っている感じになる。ジャンプのほかにもバイアスロンの鉄砲撃つイメージ・トレーニング。実弾がでるわけじゃないけど、引金をひくと実弾さながらにバーンと跳ね返ってくる。

そんな、いろんな施設があって、しかも市民がいつでもジャンプ台で飛べるという、これは強くなるよね。大倉山や宮の森は、まず選手にならなければ飛べない…。

司会：いまの進藤さんの事例だと、かなり金がかかってるわけだけれど、僕ら昔の北海道で子供時代を過ごした経験では、スキーなんていうのはいまみたいに鮮やかに曲がれる

ものじゃなかったから、直滑降でサーッていってバーンと飛ぶのをやっていた。僕くらいでもけっこう飛んだんです。おそらく余市の子なんかもっとそうで、そのなかの抜群に飛ぶ子が選手になっていったんでしょう。

さっきの内藤さんの中島公園のスケートも同じでしょう。ふつうの遊びのなかでジャンプもスケートもやったというのは、昔のほうがいいかにあった。

内藤：要するに僕らの時代は町の中で、スキーにしろスケートにしろ、やったわけだから。荒井山でスキーをやったら、帰りはスキーをはいたまま南1条とか大通りを通って家まで帰ったんです。

いまは札幌がこれだけスキー場にかこまれていても、子供が日常のなかでスキーをやるのはけっこうむずかしいんじゃないですか。やっぱり土曜とか日曜に親がクルマでゲレンデまで連れていくとか…。リフト券も買ってやらなきゃならないし。それでもスキーは学校の授業で何度か連れていってくれるからまだいいです。スキーを優先させるんで、いつもスキーにするかスケートにするかは校長の裁量ひとつなんぼやいているんだけどね。せめて全校、一回でも二回でもいいからスケート授業やってほしいと。教育委員会に聞くと、スキーにするかスケートにするかは校長の裁量ひとつなんですってね。校長がスキーのほうがいいっていったら、スキーでいくんだそうです。スキーとスケートの両方だったら、道具を揃えるのに大変ですから。真駒内の曙小学校、ああいう学校がひとつふたつ、年に一度くらいアイスアリーナにきて滑りますけれど、それくらいで、あとはないですね。

久保田：スケートのほうが金がかからないんだけどね。

内藤：金かからなくていいはずなんですけど、やっぱり金かけてかっこいいほうが好かれるんですよ。スキー靴からウェアまでかっこいいからね。スケートは服装おかまいなしで、

同じところただ滑ってるだけだから。

スポーツの地域性

司会：苫小牧や釧路、帯広あたりの小学校は、スケートやっていますよね。

内藤：あそこはスキーがあまりできないから、もっぱらスケート。道東、十勝地方はどこでも校庭にリンクをつくるんですよ。雪が少なくて寒さが厳しいから、パーッと水をまいただけでリンクができる。毎日スケート持って学校に行って毎日滑って…。それがあの辺、十勝地方や釧路は全部ですからね。ほんとうの意味の層がものすごく厚いんですよ。だからいくらでもいい選手がでてくる。本別とか豊頃とか音更とか、ああいうところの子が全国大会で優勝しますからね。そして高校へ、名門の白樺に入ったり、釧路の高校へ行ったり…。それから本州の大学に。いまあの辺の子供でも大学に行けるようになったんですから。行けるようになったといたら悪いけど、昔は行かなかったですよ、お百姓さんの子供は。

進藤：僕らがスケートやってたころは、札幌にも選手がいましたよね。新保君たち…。札幌や北海高なんかも強かった。いま、まるで札幌からスケート選手が消えちゃったみたいですね。真駒内という立派なリンクがあるのに。

久保田：真駒内は使用料が高くて、選手養成に使うのには無理なんじゃないですか。

進藤：リンクのせいですかね。たしかにあそこにはシーズン券がないし、毎日450円払うんじゃ生徒は練習できない。

内藤：リンクのせいじゃなくて…。やっぱり指導者の問題かね。札幌はスケート選手が育つ環境にないというか、スキーのほうにとられちゃってるのか。いまの中学校で対抗試合やっても7、8人しか選手が集まらないですよ。役員が30人もきて。恥ずかしくてね。連盟の指導が悪いのかとも思うんですけど、

ほんとうに選手いないんです。少年団もいちおう形はあるけれども、中学に入ったら勉強が大事だといって、やらないですものね。だから恵庭とか千歳とか苫小牧とか、その辺がどんどん伸びて、そっちからバスを貸し切りで札幌にきて、滑って帰っていく。

久保田：スケートは釧路が強いとか苫小牧が強いとか、それでいいんじゃないですか。

司会：私もそう思う。ご存じのようにいま北海道はなんでも札幌に集中しちゃってるでしょう。ヒト、モノ、カネ、みんな札幌一極集中でほかの地域のパワーが吸い取られているときに、北海道では冬のスポーツの地域性がまだいちばん残っているかもしれない。夏はみんな野球になる性格が、いまでも強いと思うけれども。

内藤：まあ、そういう面から見れば、幸か不幸か札幌にスケート選手を育てる態勢があまり整っていないから、帯広や釧路や苫小牧で育つというのは、いいことですな。

進藤：その点、スケートにくらべるとスキーは札幌の吸引力がもっと強いね。富良野なんかスキー少年団で抜群の子は中学くらいから札幌に出ちゃうらしい。そして第一高校、札商、北海なんかに進学する。

北見や函館のラグビー、室蘭や登別のサッカー、柔道やバレーの旭川、相撲のどこそこっていう具合に、あるスポーツの地域性というか、それはすごく重要だと思うんだけど、ほんとうに地域の生活に組み込まれてそうなっているのか、たまたま指導者が熱心だったりという要素が大きいのか、かなりあやふやなところがありますよね。

内藤：高校にスケートをやる先生がいるかいないかで、全然、違ってしまうからね。

進藤：僕の場合も、釧路星園を止めた翌年スケート部が消えてしまった。そして20年もして最近、橋本先生のもとで、三宮、岡崎、小笠原などの日本を代表する選手が輩出するようになりました。

司会：それぞれの地域が苦勞してようやく地域のスポーツを維持しているのに、経済力といっしょに札幌に吸収する力がいつもはたらいっている。ワールドカップ・サッカーだって、札幌なんかサッカーがとくに強くも盛んでもないのに、北海道といえば札幌招致ということになるでしょう。僕は室蘭や帯広に住んだ経験から思うんだけど、たとえば室蘭にとって札幌は「おらが都」みたいな気持ちで、反札幌にはならないのね。サッカーはおれのほうが強いのになんで札幌なんだって。

久保田：だって、はまなす国体のときにつくった室蘭のサッカー場なんて、いまはとんでもないサッカー場らしいですよ。雑草ばかりで(笑)。

司会：つまり自治体が長期に管理する予算も力もないわけでしょう。それを放置すれば結局、金のある札幌に集まっちゃう。そういう趨勢のなかで、スポーツは実質的にいちばん抵抗しているほうじゃないかと思うわけ。スポーツがその面での社会的役割を負っているといえるかもしれない。

久保田：ありがとうございます(笑)。

私も生涯スポーツやっていて、各地で何か、一村一品じゃないんですけど、そんな種類のこと考えているんですよ。パークゴルフが幕別にできましたし、カーリングが池田町にできましたし…。パークゴルフは、北海道ではもうパークゴルフ人口のほうがグランドゴルフ人口より多いんですが、これはどこでもやれますから、まだまだ伸びる。ミニテニスも東京の立川で生まれたスポーツで、最初は60歳以上の人を対象にして始まったんです。ビニール製の大きなボールを短めのラケット、ネットも1mということで、誰でもできるんですが、うまくなるとすごいんですよ。一昨年、札幌に協会をつくりまして、その後、函館にもできたようです。全道的につくってもらいたいと思ってやっているんです。こんなふうに、どこでも誰でもできるものと、ここの自

然条件を使ってという目玉のスポーツと、両方ができればいいですね。

マスコミとスポーツ

司会：内藤さんが北海道新聞社の運動部長をやっておられたころ、スポーツ記事の重点や方向として、いまのような地域性の問題を社として考えておられましたか。

内藤：よく覚えていないけど、あんまり地域性を問題としてとりあげたことはなかったですね。本当にその時その時のニュースを追うのに忙しくてね。

司会：日々のニュースと同時に、最近の新聞は長期にわたる企画をくんだりキャンペーンをはったりする、そういうのはなかったですか。

内藤：あのころは、とてもそこまでいかなかったですね。たとえば先程からでている競技スポーツ以外のスポーツの問題ね、たとえば健康とスポーツとか、少年団と指導者のありかたとか…。そういうのは文化部や社会部の問題ということになっていた。われわれにはそこまで扱うスペースもないし、スタッフも足りなかったです。

進藤：何かスポーツの記事を扱うときに、ここを重視すれば読まれるとか売れるとかいうことを、デスクや編集部で考えて割り振っていくわけでしょう。

内藤：読まれるかどうかはもちろんだけど、現場としては何が今日、一番のニュースか、ニュース・ヴァリューはどうかと、それでいきますからね、毎日。大きな大会があれば、その大会のなかでいい記録ができればそれをトップとか…。本当にその日暮しで。

久保田：私は北海道新聞のスポーツ記事にはあまり批判はないけど、「道新スポーツ」にはありますね。「道新スポーツ」は事実上、北海道だけで売れてるスポーツ新聞でしょ。それなのにどうして道内の大会を網羅しようと思わないのかと。日刊スポーツとかスポーツニ

ッポンとか、一般スポーツ紙とあまり変わらないじゃないですか。

進藤：それはやっぱり商業主義の限界で、そこまでやっても売れないという判断があるからじゃないですか。

久保田：父兄が買いますよ。自分の子供の名がでたら。

進藤：だけどやっぱりそこは市場調査やって、それをもとにしているわけだから。だから札幌の大会なんかは、かなりマイナーなものまで個人名や記録がでるからね。

久保田：本当に客観的な市場調査というより、過去の編集方針になれっこになっているんじゃないですか。1年くらい、しっかりした方針をたてて、地方のスポーツを網羅して載っけてみたらどうでしょう。それでこそ、「道新」スポーツなんだから。

内藤：昔からスポーツ欄にかんして、そういう意見はあるのね。野球ばかりスペースをとって、われわれがやっているのはぜんぜん出ないって。

進藤：野球もスポーツ紙は全部、巨人中心でしょ。そうでなければ売れないんだから。そして北海道は、とくに巨人中心でなきゃだめなんだよね。

ただ、僕の印象では、スピード・スケートが一番、例外なんじゃないですか。本州の新聞でスピード・スケートの記事は本当に小さい。道新だけ、広いスペースをさくんですよね。ときにはスキーより大きいと思うほど。

内藤：冬季競技は北海道のお膝元だしね。でも政策的にそうしたというより、ニュースを追っていけば、やっぱり冬はスキーとスケートしかないんです。スキーもスケートもだいたい互角でやっているつもりなんだけど、他の新聞がスケートのスペース小さいだけ、めだつのかね。とくに地元で大きな試合があるときには、道新だけちゃんとした取材陣つくって、細大漏らさずというか、他紙と比較にならないスペースでやることがありますか

ら。

進藤：僕が釧路にいた時分、道新に「内藤」という記者名の入った記事がよくでたんですよ。ほかの選手と「いやあ、内藤さんの書く文章はいいね」っていつていました。とにかく暖かい。選手を暖かくみて書くんです。競技のあとの講評みたいところでね。やっぱり道新のスケート記事が目立つというのは、そういう記者やスタッフの実力、厚みというか、それがあるから書くこともたくさんあるんだと思いますね。

司会：内藤さんが運動部長をしておられたころは、スポーツがだんだんテレビと結びつきだしたころでしょう。よく言われるように、スポーツのルールなんかまでテレビの都合で変えられることが少しずつ始まってくるわけですね。きのうの新聞にもでてたけど、ユニバーシアードの柔道の放映時間で田村選手を最後にするため、競技順序が二転三転したっていうような…。

そういう種類のことがいっぱいあって、大相撲は6時に終わるように仕切る時間を調整していくし、たとえばプロ野球でピッチャー・マウンドを低くしたのも、高いとピッチャー有利でテレビの視聴者がエキサイトしにくいというんでテレビ局から強い要請があったといわれてるんですよ。例の20秒ルールなんかも同じだし…。そんなスポーツとコマーシャルイズムとの接近を、内藤さんの新聞社時代に実感されましたか。

内藤：私のころはまだそれほど顕著になってない時代で、実際の競技でそのことが問題になったことは、ほとんどないですね。

ただ、テレビで放映されるかどうか一般の人びとの関心に決定的に影響しますし、それよりも、金の問題。テレビで放映されれば主催者に莫大な金が入るわけですから。ということになれば、多少、無理いわれても、テレビの都合に従うということになるんだよね。アトランタのマラソンの時間なんかもそ

うでしょ。

司会：オリンピックでは1984年ですか、ロサンゼルスくらい、そのパターンがはっきり表にでた。最初はけしからんという声もけっこうあったけど、だんだん馴らされちゃって…。

内藤：いまは、しょうがないという感じがすね。

ダボスへの道

進藤：ここで話題を変えて。内藤さんがせっかくいらっしゃったんだから、例の世界選手権優勝の話を。芋食って走ったという話も聞くし、水泳の古橋さんなんかと同じ、戦後の混乱の時代にどうして常勝の国に勝てたかという…。

司会：それに、お見かけすると内藤さん、体だって特別じゃないですよ。

内藤：いま痩せちゃって。現役のころは体重、けっこうあったんですよ。18貫とってたから72キロぐらいかな。もっともそれはピーク時で、終戦のころは65キロくらいですけどね。

僕のときは幸運だったっていうか、自分でそんな大会にでることなんか、考えてもみななかった。日本は戦争で国際スケート連盟から除名されて、まだ復帰してなかったですからね。1950年の秋に、連盟復帰させるからダボスの世界選手権にでないかと、招請状がきた。当時は海外遠征もなかったし海外からくる選手もいなくて世界から隔絶されてましたから、どういう状況か、見学かたがた参加したら、ということになったんです。だから予選やったわけでないし、当時の成績で、こいつらでいいんじゃないかということで選ばれたと思うんですよ。

進藤：内藤さんと、佐藤恒夫と菅原和彦…。

内藤：そう。二人とも王子製紙です。僕は道新だったけど、道新にはスケート部あるわけじゃないし、新聞記者やりながら僕一人で

やっていたわけだから、部費なんて1銭もない。お金の出どころがないんです。で、道新は新聞用紙買って王子製紙のお得意さんだからというのか、王子製紙がだしてくれたんじゃないかな。それとも借りたのかな、何十万か。私の小遣いを社内でカンパしてくれて、十万円くらい集まったのをもらってね。

当時、世界選手権というのは500m, 1500m, 5000m, 1万mの4種目の総合選手権ですよ。オリンピックは単種目で、500は500のスペシャリストがエントリーしてやるけれど、世界選手権は4種目総合だから、どこも総合に強い選手をだしてきた。当時500mの世界記録もったファルスタットというのは、ダボスにはきてましたけど、世界選手権にはでなかったんです。僕は昔はむしろ長距離をやってたんだけど、その時はもう28歳と11カ月ですからね。とうが立ってて、体、続かなかったです。

久保田：いやいや、まだとうは立ってませんよ（笑）。

内藤：子供も二人半でしたから。

久保田：むしろ精力をそっちに費やしたんですね（笑）。

内藤：費やそうにも、栄養をとるモノがないんです。肉なんか、ひと月に1, 2回あたるかどうかというくらい…。芋、カボチャが主で。国体なんかも、みんな1日3合とか、米もって行ったですからね。だから長距離の体力なんか、ないですよ。短距離でなんとかごまかして、それで500mで優勝できたということです。

一応、1500も5000も走りましたよ。5000は全然だめだったけど、1500は30人くらいの真ん中辺だった。

司会：あのときの43秒フラットは日本新記録だったでしょ。世界的にも…。

内藤：当時の世界記録はさっき言ったファルスタットの41秒8です。僕らはダボスまでプロペラ飛行機を次々5つくらい乗り換えて、

南回りで5日かかって行ったんですよ。そして時差があるでしょ。そんな調子の悪いときに、大会1週間前に国際競技があって、それにでたら43秒フラットでした。僕はアウトコースから走って、インコースはパヨールという、前の年に5000mの世界記録つくった男だったんです。アウトから入ってチェンジコースで一緒になった。こっちは初出場のヤポンスキー、相手は世界記録保持者だから、僕はゆずって彼を先にやった。ところがそれで43秒フラットだったのね。氷もいいし、あと1週間調整したら42秒そこそこはいけるなという気になった。ひょっとすると世界記録にも届くかなと…。

だけど1週間たった当日、前の晩から気温が上がって、朝行ったら氷がベタツとしてとける寸前。全然、氷が滑らない。それでもやっぱり43秒フラットだった。僕がそれまで国内で出した一番いい記録は43秒7です。だけどダボスというのは「スケートの聖地」といわれているところで、高地だから空気は薄いし氷は滑るし、それまでよりいい記録がでるのは当然だったんです。だけど、どのくらい出るかは全然わからなかった。

記録をめぐるって

司会：僕は当時、中学生で、内藤さん優勝のニュースに胸が躍ったのよくおぼえています。だから今日お会いできることにも胸が躍った…（笑）。

ところで、記録という点でいうと、たとえばスキーだったら、昔、銀メダルをとったころの全盛期の猪谷選手と、いまの装備や技術を使ったスキーマーと試合をやったら、猪谷に勝つ選手は日本に何百人もいるだろうといわれるくらい、スキーの性能やそれに伴う技術が変わってきているわけですね。スケートでは、昔の43秒フラットといまの35秒との間にあるものは、器具やリンクや技術や…、何が最も大きいんですかね。

内藤：器具もちろんあるけど、リンクの要因も大きいし…。選手のトレーニングも、スピードということに向けてわれわれと全然違う量、やってますからね。

昔は室内リンクがなかったんです。室内だと、まず風がない。それからリンク・コンディションが一定していて、一番滑る状態をキープしてられる。そうすると、そういうのを前提にした技術のトレーニングになりますからね。カーブなんかでも43秒台で回るカーブと、いまは35秒台くらいかな、それで回るカーブは遠心力が全然違うんです。カーブのラインに沿って回るといっても、いまはほとんど沿って回って出てくるのがいらないんです。第1カーブ、第2カーブはいいけど、第3、第4になるとインコースからきたのがみんな外側ぎりぎりに出てくるようになった。スピードがあるから回っていけないんです。それだけ氷が滑る。となると、それに対応する強さをトレーニングでつくらなければならない。

久保田：だからいちがいに器具か技術か体力かっていえないですよ。全部が切り離せないんだから。体力でいえば、体位の向上ということもあるでしょうし、昔といまを比べたってしょうがないと思うんですよ。同じ条件で誰が強いということしかないですよ。まあ、2、3年の差だったら比較する意味があるかもしれないけれども…。

体操でいえば、器具が高度化してたとえば鉄棒の高さが高くなれば宙返りが高くなる。いままで2回宙返りができたのが、10センチ高くなれば3回宙返りができるということになる。そうすると、降りるときのもっと安全なマットができると。こんなふうに平行してきましたんです。僕らのころと、いまでは全然違うんです。

進藤：僕は北海道にきてから初めて内藤さんに接したわけですけど、周りから神様みたいに見られて尊敬を集めていた。先程、内藤さんは世界選手権は総合で争う競技だから

500mだけでは、みたいなことおっしゃったけど、あの後、鈴木恵一君もずっと世界選手権、500mで勝ったんですよね。今年の春、オスロに行ってノルウェー人のグンヌルフ・スルエッタの家に泊まったら、鈴木恵一君のこと知ってるんです。スタートのときの彼のフォームを真似してみせるんです。すぐわかるって。ふつうの庶民があんなに良く知ってる。日本人よりはるかにね。あの人たちのスケートにたいする愛着がそれだけ深いんでしょうね。

久保田：スポーツにたいする意識が高いというか、生活のなかで自然にスポーツにかかわってる感じがするよね。

進藤：世界記録というような記録の話とはちょっと違うんですが…。

ここに昨日の道新、持ってきたんです。有森さんが優勝した北海道マラソン。これに完走した全員の名前が載っているんですよ。僕はいま58歳ですけど、58歳以上の人が26人、4時間以内で完走してるんです。70歳という人もいますよ。そういう人が42.195キロを4時間以内で走っているというのは、ちょっと信じられない。僕のいまのジョギングのペースで換算すると5時間かかるんですよ。彼らの速さの秘訣がどの辺にあるのか…。

おそらくそういう人たちは、それぞれ自分の目標たてて、自分で一種の記録に挑戦していると思うのね。それは世界一になるとか日本新記録つくるとかいうのと違うけど、やっぱり記録というものがあるのが、面白いところで。

司会：進藤さんのワールド・ロペットなんか、まさにそれだよね。

進藤：生涯スポーツで高齢者や主婦なんかのスポーツを指導するときに、もちろんスポーツの楽しさを味わってもらうこと、動くのが楽しい、歩くのが楽しい、そしてストレスから解放されるようにもっていくのがいちばん重要だということは、よくわかるんです。しかし同時に、年をとってもけっこう記録に

挑戦するという精神もあるんですね。それはいまのマラソンみたいに何年も継続して記録をキープするという場合もあるだろうし、新しい分野に挑戦して、記録が伸びるという実感を持つ場合もあるでしょう。

司会：僕もそれは思うんです。自分で中高年者として水泳を習いにいったときの経験では、指導者は若い人には技術を教えるけれど、われわれには「余り無理しないで楽しく。怪我したら終わりですよ」とかなんとかいって、まじめに技術的なこと教えてくれないコーチがいる(笑)。客観的にはある程度、正しいとは思いますが、スポーツってその辺、百人百様で、身の程知らずに目標たてたりするじゃないですか。

内藤：元気でうらやましいね。私なんか、気分転換できれば、それで最高だね(笑)。

久保田：たしかに生涯スポーツにもやっぱり目標は設けなければなりませんね。ただ競技スポーツみたいに、世界一を頂点において、それに向かってたてる目標というのと違って、必ずしもタイムを計測するようなことになりませんが。年寄りだから進歩はあきらめなさいという雰囲気にならないようにね。

大学の体育——その1

司会：ここ1, 2年、学会でいろんな大学の研究者と食事をしたりしているとき、教養部をどうするかという話がよくでるんです。その際、各大学で英語どうする、自然系の科目どうするっていう話題ではみんな熱弁ふるうんだけど、僕が体育はどうなの？って聞くと、ほとんど議論がその先、進展しない。このあいだは大阪のある大学の先生が「体育なんか、そんなもの大学に全然必要ない」って断言しました。だけど必要ない根拠を説得的に展開できるわけではない。率直に言ってすごく認識レベルが低いと感じるんです。大学の先生ってスポーツが弱い人、多いですからね。体育あるいはスポーツが大学教育のなか

でどんな役割を果たさなければならないのかを、とりあえず、たてまえからでもいいから教員が議論しなくちゃと思うんだけど、そういう機会が、札大にかぎらないんじゃないだろうか。

とすれば、体育の先生もわれわれにたいして、積極的にもっと啓蒙してくれなきゃいかんのじゃないか。ということで、久保田さん、一席ぶってくださいませんか。

久保田：それは私は体育の教員ですから、学生の体育授業はそれこそ健康のためにやらなきゃと思ってますよ。実のところをいえば、いま週1回の体育は、それだけではお遊びで、週2, 3回は運動やるようにもって行ってやりたい。ところが一方で文部省が、体育なんか選択でいいとか、逆行したことをいいます。学生はだまってるって大学4年くらいで体力のピークを過ぎて、下り坂になるんですよ。そういう大学生の時期に体力を養ってやらなきゃならないのに、「選択でいい」っていう文部省の見解は、本当に心外です。「知育、徳育、体育」なんて文部省いつてきたけど、ほんとに体育がきちっと位置づけられたことなんて、ないですよ。

何やるにしたって、健康じゃなきゃできないですよ。運動しなくても健康で頭脳明晰な人もそりゃいるでしょうけど、教育という立場に立ったら、やっぱり運動をとおして健康を自分のものにすることを教えなければね。その意味での最低限は、週2, 3回だと僕は思ってるんです。それが逆行してきた。

進藤：そのことでちょっと…。僕は中学、高校の教師を8年間やったあと、札大にくることになりました。飯塚浩二という東大を定年になった先生の助手をやらないかという話がきたんです。そういうのは大学院でちゃんと修業をした人のすることで僕なんかできるわけないと思って、いったんお断りしたんです。

そしたら飯塚先生が、「皆さんが推薦してく

れたんだけど、私はあなたのこと知りません。だけどいいんじゃないですか。聞くところによると、君は冬のスポーツやってきたらしいね。勉強というのは体がなければできないよ。体に支えられて集中力ができるんだ。集中力が勉強させるんだ。その体力があれば君なら8年のブランクくらい、そう長い時間かけないで埋められるから、その点は心配しなくてよい。」といわれて、「そういう見方をすれば、30歳にして大学に行ってもいいのか」みたいな、ちょっと暗示にかかったようなことがあったんです。

その後も、僕はずっと思い続けているんです。たとえば外国にいて学者をみると、いつも体力あるなあと痛感するのね。頭脳明晰とかアイデアとかいうことよりはるかに、膨大な資料に猛然向かっていくとか、問題を何年もとことん追跡調査していくとか、そういうことで日本の学者は彼らにかなわないなあ。別にそんな大学者でなくてもですよ。大学で体育の授業を受けたからかどうかは知らないけれど(笑)、とにかく体力と集中力と頭を使う仕事が、そんな別々のことでないというのを、彼らは少年時代から身につけてきているんだと思う。日本の教育体系のなかでは、いかにもそれが別々のことのように進められているんじゃないだろうか。

司会：それは同感だなあ。とくにわれわれくらいの年齢になって研究を続けるとき、それを痛感しますね。

久保田：札大の実情をお話ししますと、去年まで必修ですから3000人からの学生が授業、受けてました。今年から選択になったので、どのくらいとるかなと思ってたら、6割とりました。そして自分でやりたい学生がきてるわけですから、授業はいままでより非常にやりやすい。

メニューも変えてみました。前の年にアンケートとして「どういう種目をやりたいか」と。それを反映させたメニューということで、

6割とってくれたのかもしれませんが。2割くらいだったらどうしようかと思ってましたけど。何かの選手になりたいとかじゃないけれど、動きたいって子がきてるわけですから、人数の問題だけでなく、教えがいあるというか、今年はとてもよかったと思ってます。

もっと希望を述べれば、彼らに週2回なり3回なりチャンスを与えて、社会にでたときの社会体育、いまは企業なんかでも厚生面が進んでますから、そのときのリーダーシップをとれるような人間をつくりたい。ですから「技術的にもっとうまくなりたいのならクラブに入りなさい。そうじゃなくて、スポーツの楽しさを実感して、ルールを覚えて、スポーツ活動を理解してくればいいんだよ」と。社会にでて企業がレクリエーションはじめるんな活動するときに先頭にたってやれる、そういう人材を育てたいというのが、われわれ体育の望みですね。

進藤：大学で体育が必要かどうかを議論するとき、大学生活で健康のために体を動かすのが重要だからという面だけをいえば、それじゃなぜ4年間やらないで1年で単位与えちゃうのか、あるいは週1回じゃしょうがないんで、そのくらいならあってもなくても同じだという意見がでてくる。実際そういう意見を聞くことがあるんです。

実は体育教育はそれと同時に、さきほど久保田さんがいわれたことに関連するんだけど、スポーツの意義とか楽しさを実感させる、自分の体を自分でどうすればどのくらいコントロールできるのか、それをできるだけ高い次元で教えて社会に送り出すという課題があると思うのね。そうすると、週何回かとか、4年まで授業するかどうかじゃない。大学で法律教えたり経済教えたりして社会に送り出すのと同じだと思うんです。大学の体育授業の必要性を議論するとき、意外にその点が入ってこない気がするんだけど…。

久保田：まったくおっしゃるとおりだと思

いますね。その点は今年からの授業に、前より配慮したつもりなんです。今年から、これまで「実技」といつたのを「体育」という名称にして、通年1単位だったのを2単位にしました。そして1年から4年までの、いつでもとれる。その通年2単位のなかに4回の講義を含めて、解剖学なこと、体をつくる骨格や筋肉のこと、あるいは救急法で怪我したときの応急処置とか、トレーニングの理論なんかを入れたんです。これと別に「健康論」という講義もやっていますよね。おっしゃるように、そういうのを、自分の体を動かすことと一緒に身につけて社会に出ていってほしい。そうすれば自分でスポーツを続けていく力にもなるだろう、と。

司会：札大での工夫は私も少しは理解しているつもりなんです、ほかに全国の大学のどこかで、いいなあとか、うらやましいという実践ってあるものですか。

久保田：施設とかスタッフとか、その面ではありますけれども…。全国大学体育連合というのがあって、ここ3、4年、大綱化にともなう体育授業の問題はずいぶんやってきたんです。私学となりますと、理事会の考え次第で体育なんかいらんということ、体育の先生がみな事務職員になっているような例も聞いてますね。

それに比べて、札大はみなさんの理解をいただけてますから、私たちは非常にありがたい。施設もありますから、工夫次第でいろいろやれると思っているんです。もっと学生が応募してきて、有効に授業できるようにしていきたい。他大学の先進例というより、私たちは今年の札大の実態から、どういう反省をして来年何をやるかを模索してるわけです。

大学の体育——その2

司会：客観的には、体育を選択制にしたら体育を受講する学生がうんと減るかといえば、減らないというのが全国的な現象だと思うん

です。つまり、やっぱりニーズがある。けどそのニーズをふまえて何をどんなふうに大学でやるかが、まだつかまえていない気がする。

進藤：体育ということがいままで、体育の先生だけの特別の範疇になっちゃってる。これからの教育の中では、体育をもっと広く設定して、いろんな人に担わせる方法があるんじゃないかと思うんです。

久保田：具体的に言ってほしいですね。われわれも模索してるんだけど、わからないことがたくさんあるんです。教えていただきたいですね。

進藤：僕もそんなにたくさんアイデア持ってるわけじゃないけれど、たとえば体をきたえるとか、体を動かすのが好きになるとかいう点だけで、私の小さな実践からいいますとね。僕の地理のゼミは教室のほか年に8回くらいは土曜、日曜かけて山に行きます。だいたい事前に資料で学習した上で、登りながら地質だの地形だの、植物だのを話題にしていくな。そういうことをやる前提でゼミに参加してくる学生だからともいえるけど、やっぱり1年8回の登山でものすごく学生は変わる。山登りそのものばかりでなく、テントの張り方、食事の作り方、グループでの助け合いまで全部含めてね。そして何より、体を動かすのが好きになって、てんでにいろんなスポーツやるようになる…。

久保田：まさに教養そのものじゃないですか。

進藤：そう。ほんらいは僕らの教養教育のなかで、体と心を一緒に発達させる課題をみんなが持ってるはずなのね。そういうふうにと考えると、いろんな先生のアドバイスや助力を受けながらやる方法もあるんじゃないかと思う。体育の先生だけが、先程からだされている体育教育の課題をまるごと担当するのは、負担が大きすぎて、重みに耐えられないんじゃないかと。もちろん体育の先生がリーダー

シップをとってですが、健康管理、体力の向上、ときには競技力の向上なんかにまで広げた多人数の教員によるとりくみができないかなという…。

久保田：反論ではまったくないんですが、こんなふうに大学の体育授業の話、すすめていいんですか。内藤さんに悪いような気がしますけど。

司会：いや、これやらないと鼎談、終わらないんです(笑)。大学の先生がこういう議論やってるところに、学外から率直に意見をいただいいただくのも今日の予定に入ってますから。

内藤：関心ありますから、どうぞ続けてください。

ただ意見といっても、よくわからないですけどね。大学の体育教育でどうしてくれということよりも、人間が成長して大人になって、父親や母親になっていく場合、自分が全然スポーツを経験したことがないと、子供にも教えられないし、子供をどこかに連れ出す気にもならないしね。大学でせっかく教育受けた者なら、体を育てるとか鍛えるとかいうのはこういうものだという基礎くらい、勉強したり体験したりする必要はあるんじゃないかと思うんです。

進藤：具体的にいまの体育授業に加えてできることといったら、大学によってはスキー授業で何日か合宿するようなこともありますよね。スキーでなくマウンテンバイクで合宿した大学の例も聞いたことがあります。そういう場合、バスを何台も連ねていくわけですから、学部の多くの教員が支援態勢をとって、技術そのものは体育の先生や専門家が教えるかたちもあるみたいですね。

それから、市民レベルでおこなわれるいろんな大会とか、マラソンでもクロス・カンントリー・スキーでも、そういうのに出て認定証をもらってきたら、単位に加算するとか…。いまはアルバイトを単位に認める大学もでて

いる時代ですから。実際、マラソンやクロス・カンントリー、あるいは市民スキー大会なんかの出場者名簿を見ると、ある大学のある学部なんか集中的に多数参加している現象、ありますよね。あれはきっと、学部全体に、それに参加しよう、集まってその練習をしようという雰囲気ができているんだと思います。もちろんクラブ活動で参加する例もあるわけですが。そんなのを積極的に勧める大学の気風があるのとないのとは、ずいぶん違う。そしていままでも札幌大学は、そういう雰囲気があんまりある方じゃなかった…。

久保田：今日は体育にまったく関心がない先生が一人きたらよかったと思うんですよ。この4人じゃ、体育、盛り上げる話になるのは当たり前なんですね(笑)。「体育なんか嫌いだ」という先生が一人いて、この議論に参加してくれればね。

進藤さんがおっしゃったようなこと、われわれも考えないではないんです。だけど、他の先生の悪口いうわけじゃないんだけど、そういうのを体育教員のほうから提起して実現するのは非常にむずかしい。いまだって、運動部の選手が遠征にいくとき先生がたにお願いするわけですが、「関係ない」ってただの欠席扱いにするでしょ。大学の名前背負って遠征するんですよ。ほかの科目だったら、学外研修なんかもっと配慮してるのにと、ひがみかもしれないけど思いますよ。そういう感じがなかったら、僕だって市民マラソンにでようといえますよ。全国大学野球にでるとなったら、みんなで応援にいきましょうといえますよ。スポーツの応援だって体、使わないから体育っていえないというようなもんじゃないんです。早慶戦みたいにワーッとやるのは大学の活性化にもなるし、スポーツに接近するきっかけにもなるし。札大がもう少し、そんなふうになってもいいんじゃないかという気がするんです。

進藤：だからもちろん、理解しあう条件と

いうか、土壌をつくる努力をわれわれ全体がしないと…。スポーツといたら、勉強とか知的発達の対極におく日本の風土をどう破るかは、大学教育全体の課題なんだから。

司会：大学の体育が在学中の健康と体力づくりだけでなく、生涯にわたってスポーツを生活のなかにとりいれる「教養」教育だという観点をしっかり立てると、そこからもっといろんな授業や活動の形態が、少なくとも理念として考えられると思うんです。基本的に体育教育だって経営学や法学の教育と同じく、自分で問題に、つまり体力づくりにとりくむ力をつけてやらなきゃならない。いわゆる技術や知識を押し込むだけじゃないということ、同じだと思うんです。

となれば、本当は一人ひとりの学生が自分に合った体づくりを模索して、その模索のなかから自分がやりたいスポーツと到達目標を選びだすのが理想ですよ。たいがいの子はテレビに映る種目にひかれて、それが自分の好きなスポーツだと思っているんだけど、それをもっと客観視できる環境を与えてやりたい。その上で、自分の目標を定めるのを援助してやりたいのね。

久保田：その面では、身障者や内蔵疾患の子たちの養護コースというのがあるんですよ。そういう子は高校時代まで「おまえは見学だ」とされてきたわけ。彼らのスポーツとのかかわりは文字どおり見るスポーツだけなんですよ。そういう子に、先程いったユニカールだとか、バンパーというビリヤードの小さいのをやらせて、「こんなもあるよ」、「君にもできるよ」と。そのうちに「先生、ちょっと卓球もやってみたいな」とか「バドミントンもできるかな」となってくるんです。

司会：それをもっと一般化したい。入学時に体力測定するでしょう。あの測定をもう少し工夫して、学生各自にそれを最初の自分のデータとして持たせてね。トレーニング・ルームなんかも、もっと活用できるんじゃない

ですか。

それから運動部の選手。僕は運動部の部長や顧問やってて恥をいうようだけど、彼ら選手の問題は、自分が熱中しているスポーツへの取り組みを通じて知的にも高まるという面があまりに少ないこと。具体的には久保田さんがいわれた解剖学的なこととか、自分がやってるスポーツの歴史的な変遷とか今の議論点とか、そういうものに無関心、無知で、コーチにいわれたとおり体、動かすしかやらないのが多い。だから他人への指導や助言も、ほとんどフォームをいじるかたちでしかできない。僕は進藤さんが先にいわれた、市民マラソン参加にも単位を認定するとなると、運動部選手の日ごろのトレーニングにはどうだということにもなるんだけど、その場合、彼らには自分のやってるスポーツでちゃんとしたレポートくらい書かせて単位を与えるのがいいんじゃないかと思っているんです。社会にでてサラリーマンになったとき、彼らが大学でそのスポーツやってたことはすごく回りから期待されているわけだから、それに応えるのも大学教育の課題だと思う。

お わ り に

司会：と、司会者が分を大きく越えたところで教育論をおしまいにして…(笑)。今日は、北海道の地域性と生活の問題を、スポーツをテーマに話してみようということでお集まりいただきました。テーマからややそれた感じがなきにしもあらずですが、こんな種類の話がこれまで私たちのまわりでほとんどされていないことを考えると、多角的な問題提起の意義はあるんじゃないでしょうか。

最後に、どなたか司会者にかわって何かしめくくりをおっしゃっていただけませんか。進藤さん…。

進藤：今日の大テーマは、北海道に生活する者として、冬をどう楽しく過ごすかということですよ。これまでの「冬を耐えて、春

を待つ」ことから「快適な冬が待ち遠しい」時代に進める課題。衣・食・住それぞれにその課題に取り組んできているわけですが、スポーツからどんな展望がだせるかということですね。

住の条件の充実にあわせて、冬に屋内で夏と同じように体を動かす条件も格段に広がってきていると思います。個人の住宅内でもそうだし、室内スポーツ施設が多くなって夏と冬のスポーツの区別がなくなっていく方向が、ひとつ進んでいる。冬にプールで泳いだりテニスをしたりね。

と同時にやっぱり、冬という固有の条件を生かしたスポーツにかかわらないと「冬が待ち遠しい」ことにはならないでしょう。となるとアウトドア。身の回りに雪や氷があり、雪の山と森がある。小鳥の観察も、木の葉のない冬の森のほうずっと容易です。カンジキかスキーをはいてね。それぞれの体力に合わせて冬のアウトドアを楽しむ仕方は、これからまだまだ広げる可能性があると思います。

もうひとつは、いろんな競技会に素人というか、誰でもが参加する風習をぜひ育てたい。クロスカントリー・スキーでいうと、北海道では1月から4月にかけて30回ほど大会があるんですよ。自分の都合にあわせた選択ができます。こうした大会にでる目標を設定しておく、年中の日常の軽いトレーニングにも励みがでるし、長続きする。

素人が自発的に取り組むスポーツでできる仲間というのは、ひょっとするといちばん打ち解けた、楽しい仲間なんじゃないでしょうか。僕はワールドロペットに参加してここ数年、いろんな国で走ってきましたが、その都度、ただの外国旅行では絶対に得られなかった人間づきあいことができました。今年もオーストリアの60kmを皮切りに、イタリア70km、ドイツ55km、エストニア60km、フランス76kmを照準において、いま条件づくりをしているところです。

内藤：今日は皆さんのお話をうかがって、勇気づけられました。高齢化時代を迎えて、どんな地域でも生活に合わせたスポーツへの需要は、潜在的にたいへんな高まりをみせているのだと思います。だけどそれを現実化するのに、良い指導者が決定的に足りない。もちろん施設などの条件の足りなさもあるでしょうが、そういうのはみんなの要求が盛り上がってきて、みんなで実現したほうがいいとも言えるんですね。久保田さんに続いて、ぜひ良い指導者、あるいはそれを目指す人材が輩出してほしいです。

(この座談会は1995年8月29日におこなわれた)